

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第829号 平成26年11月4日

## 小1の壁

「小1の壁」というのは、小学校に入学したばかりの1年生が、集団行動がとれないとか落ち着いて先生の話が聞けない等学校生活に馴染めない状態にある事をいいます。

「小1の壁」の要因は、子ども達にとって幼稚園や保育園との環境の大きなギャップにあると考えられますが、小学校の教師の皆さんは、子ども達が学校生活に馴染むまでの数か月間、気の休まる時はないのではないかと思います。

ところで、子どもの小学校の入学は、共働き世帯にとっては、今のまま仕事を続ける事が出来るかどうかという厳しい判断を迫られる厚い壁となっています。小学校に入学した子の放課後の居場所の確保が容易でないという事が大きな原因ですが、「小1の壁」は、子どもだけでなく保護者にとっても大きな問題となっています。

子どもが小学校に入学すると、一般的には、祖父母等近くに子供の面倒を見てくれる人がいなければ学童保育に預ける事になりますが、学童保育の数が少ない事に加え、その使い勝手の悪さから、現実には子どもの預け先に悩んでいる保護者は少なくありません。

全国学童保育連絡協議会の調査では、学童保育の待機児童は今年の5月現在で約9千人としていますが、それは実際に把握出来た数に過ぎません。現実には、時間や料金等の問題があり利用申し込みをそもそも諦めてしまっている方々も相当いると見られており、いわゆる潜在的な待機児童生徒は40万人以上ともいわれています。

また、学童保育が預かってくれる時間について、夜7時までというところが圧倒的に多いため、保護者にとっては折角の制度も使い難いものとなっています。

学童保育は、共働き家庭や母子・父子家庭の小学生の子供達の毎日の放課後（学校休業日は一日）の生活を守るために設置されているものですから、より弾力的な運営が必要である事はいうまでもありません。

こうした中、8月13日付の日本経済新聞に、三重大付属病院内での学童保育所の設置について紹介されていますが、これ以外にも企業内に保育所等を設置する動きは広がっており、人材確保の面からも、今後そうした動きは更に加速するおのど期待されます。

国は、「少1の壁」の解消を目指し、学童保育（放課後児童クラブ）を19年度末

までに約30万人分の受け皿を整えるとしていますが、これは、潜在的待機児童生徒の現状からすれば一歩前進といえるでしょう。ただ、考えなければならない事は、そうした数の問題だけではありません。国を初め各地方自治体においては、子ども達はもとより保護者にとっても活用し易い学童保育となるよう、サービスの質や費用負担の問題等について条件整備になお一層努めていただき、「小1の壁」を更に薄く、低くして欲しいと願っています。

(塾頭：吉田 洋一)